

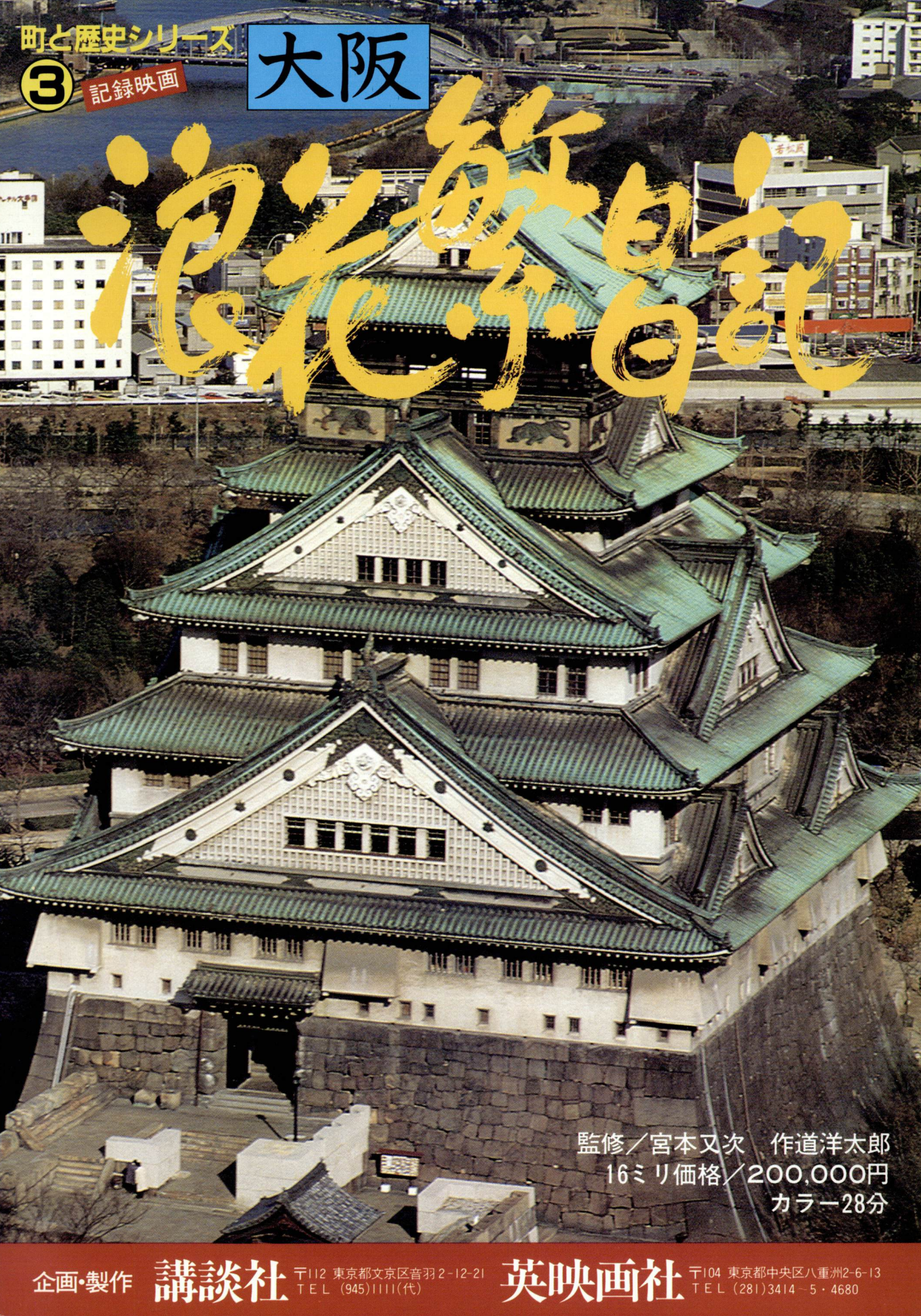
町と歴史シリーズ

3

記録映画

大阪

# 浪花舞日記



監修／宮本又次 作道洋太郎  
16ミリ価格／200,000円  
カラー28分

企画・製作

講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

TEL (945)1111(代)

英映画社

〒104 東京都中央区八重洲2-6-13

TEL (281)3414-5・4680

製作意図

秀吉の天下統一以来、大阪商人は始末、才覚、算用を旨として、移り変わる社会に対応しながら天下の台所として町を発展させてきた。この「大阪―浪花繁昌記」は、流通経済の中心として、西回り、東回りの回船航路が栄えた元禄頃の大阪に焦点を合わせ、経済発展の背景と、町人文化成立の歴史を描こうとするもので、すでに製作された「町と歴史シリーズ」の、「東京―大江戸の春」「京都―洛中洛外」に続く第三作目である。

スタッフ

企画 野間 惟道 効果 小森 護雄  
 製作 服部悌三郎 録音 甲藤 勇  
 脚本 柿本 昭三 演出助手 鈴木 康敬  
 演出 山添 哲 撮影助手 小林 治  
 撮影 廣内 捷彦 製作担当 宮下 英一  
 照明 岡本 健一 内海 穂高  
 音楽 池多 孝春 現像 東洋現像所  
 解説 小池 朝雄

協力

大蔵省造幣局 今宮戎神社  
 大阪府立中之島図書館 清正宗酒造株式会社  
 大阪市教育委員会  
 大阪市立博物館  
 大阪大学  
 大阪城天主閣  
 財団法人文楽協会  
 三和銀行  
 サントリー美術館  
 神戸市立南蛮美術館

解説

**秀吉の町づくり** 16世紀末、天下を統一した豊臣秀吉は大阪に城を築き、ここを覇者の根拠地とした。大阪は水運に恵まれ、その水路は国内はもとより、遠く海外にも通じていた。秀吉は堺や平野郷の豪商たちを移住させ、大阪を政治と経済の中心地として発展させた。しかし秀吉が没し、大阪冬・夏の陣の戦いで豊臣氏は滅んだ。

大阪の町はこの時、城もろとも焼払われる。「大阪夏の陣図屏風」は両軍の激突の様子を克明に描いている。

**天下の台所** 覇権を握った徳川家康は、政治の中心を江戸へ移した。しかし大きな打撃を受けた筈の大阪はたちまち復興する。当時江戸は急激に人口が増加し、幕府はその生活物資の補給地を、産業の発達していた上方に求めた。こうして大阪は諸国の産物の集散地として大いに繁栄した。そのころの町の情景は「大阪市街図屏風」に偲ぶことができる。市内に縦横に掘られた運河は、淀川の氾濫から町を守り、舟運を便利にした。「大阪三郷町絵図」は元禄に近い頃に描かれた貴重な資料である。

**中之島と淀屋常安** 今、関西経済の中核というべき中之島は、もともと淀川の中州に過ぎなかったが、豪商淀屋常安によって開拓された。

江戸時代は、米が経済の基調で各藩は年貢米や自領の産物を大阪で商人たちに売り捌かせ藩の財源とした。このため中之島周辺には各藩の蔵屋敷が並び、元禄年間には三百万俵の米が大阪に集められ、米相場が決められた。

**両替商と大名貸し** その頃は、金貨・銀貨、そして銭と三通りの通貨がそれぞれ流通していたので、その交換や為替業務を両替商が行った。裕福になった商人たちの中には、産物を担保に大名に金融を行う者もでてきた。

**町人文化 西鶴と近松** こうして経済力を高めた大阪町人たちは、元禄文化の主役ともなった。井原西鶴は「日本永代蔵」や「世間胸算用」などで、始末、才覚、算用を旨として商いに精出す新興町人の姿をリアルに描いている。文学より、さらに身近に庶民の心を捉えたのは歌舞伎であり、人形浄瑠璃であった。大阪朝日座の舞台で演じられるのは、1711年に初演された近松の名作「冥途の飛脚」。

**大阪町人の学問所** 1724年、町人たちが出資して学問所懐徳堂が作られた。1838年、蘭学者緒方洪庵が開いた適塾。その名簿には、幕末と明治の日本を支えた村田蔵六、橋本左内、福沢諭吉などの名前も見える。

やがて明治になると、新政府は造幣局を大阪に開設した。新しい貨幣を鋳造するための大判や小判が、大阪にもっとも多く貯えられていたからである。この時から造幣局は日本の貨幣を製造し続け、また大阪の化学工業の基礎にもなった。

大阪の人々の持つ合理精神は常に新しい価値を求め続け、そのエネルギーは今も渦まき、時の流れと共に町は絶えず変容して未来を目指している。(28分)



▲文学をはじめて庶民にまで広げた井原西鶴。



▲関西経済の心臓中之島は、淀屋常安が開発。



▲近松門左衛門作、文楽の舞台「冥途の飛脚」。